

知識から創造へ

岐阜県博物館長 高田 晃



博物館を訪れる人は、珍しい物、貴重な物を見て知識を増やすことを喜びとしたり、自分の経験を再確認して安心することを目的にする人が多いようです。

しかし博物館の一番の楽しみ方は、展示品を見て、そこからあれこれ想像して考えを膨らませて、自分流の新しい世界を創造することにあるように思います。

例えば、デスモステルスの化石骨格を目の前にした時、基本的な知識があれば、ある人はデスモステルスが生きていた時の鼻・耳・足・尾・眼・口・表皮などその形姿を思い浮べるでしょう。ある人はその食物のことを考えるでしょう。またある人は、生育当時の気候・植物・動物・生育場所などの環境を推測するでしょう。さらに、繁殖・育児はどの様なものであったのかを考える人もあるでしょう。化石採集に興味のある人は、標本の埋もれていた様子から、生体が化石になるまでの過程を考えるでしょう。また、同じ地層に含まれる他の化石をあれこれ想像することでしょう。一体のデスモステルスの化石骨格の展示から、限り無くイメージが広がり、時を忘れて楽しむことが出来るのです。そこには、眼前の展示品から新しい世界が創造され広がるのです。

これが美術・工芸品であったら、どんな世界や作品の夢が広がるのでしょうか。

歴史資料であったらどうでしょうか。

先日、ある人からスウェーデンの博物館でのバイキングの遺物の展示の話を聞きました。ここでは展示室は海に面しており、ドドンと寄せ

ては返す泡立つ海を背景に、発掘された木製の船一漕だけが静かに置かれている。反対の壁面には、発掘の記録映画が映しだされているだけで他には何も展示されていない。展示は単純なのにショックといえる程に強い感動が広がった。バイキングを祖先に持つスウェーデンの人々ならばもっと深く、懐かしく想いが広がることであろうとしみじみ思ったと話しておられました。

ところが今の日本の多くの博物館では、やはり、できるだけ珍しい物、貴重なものを多く展示したいと思い、そのように努力を重ねています。さらに、蓄積した研究成果を少しでも詳細に解説しようとして、見学者を飽きさせていることが多くあるように思います。説明が多すぎて、見学者からイメージする楽しみを奪っているのかも知れません。

●何を目指して、何をどの様に陳列するか。

●説明抜きで見学者の想像力に委ねるのはどの部分か。

●最も効果的な解説方法はどれか。

さらに検討してみる必要があるように思います。特に「見学者が自分で想像出来る余裕を大切に」「見学者のイメージが広がるように解説する」視点を、もっと取り入れても良いように思います。

博物館にも、茶室の主客のように、静かに一個一個の展示品と対話ができる空間が、もっと有っても良いと思うのです。

そこから素晴らしい創造が生まれます。博物館を、知識情報の集積所から、未来に夢が広がる創造出来る施設にしたいものです。

第72回 公開講座報告

「旗本・馬場大助の世界」

期日 平成9年5月11日(日)13:30~15:00

場所 岐阜県博物館ハイビジョンホール

講師 佐々木利和氏(東京国立博物館資料第二研究室長)



5月11日(日)午後1時30分から、岐阜県博物館ハイビジョンホールにおいて、第72回公開講座として、東京国立博物館より佐々木利和氏をお招きして「旗本・馬場大助の世界」という演題で講演をしていただきました。

講演内容の概要は下記の通りです。

1. 江戸後期の自然科学研究の状況について

天明の大飢饉の経験から各藩並びに市民に至るまで、物産振興への関心が高まっていた。特に飢饉対策として、食べられるもの、薬になるものが研究され、それらは本草学の発展に結び付いていく。多くの本草家達が色々の植物を栽培・観察したが、植物ばかりでなく動物・鉱物に至るまでの広範囲にわたる事物を取り上げた。文化・文政期の平和な時代を迎え益々この傾向は深まって行き、社会全体に格物究理の思想と科学的な物の見方が広がり、博物学探究が盛んになる。人々はより珍しい物、より変わった物、珍品・奇品を手に入れようとして奔走する時代でもあり、それに拍車をかけたのが長崎・琉球からの貿易品であった。この様な博物や物産に対する強い関心が当時の美意識や価値観に写真・写生・実物・本物志向のリアリズム(自然科学研究)が育っていった要因である。

2. 緒言について

文化・文政の自由闊達な時代の次に来たのが天保の改革の時代であったが、この改革により各藩は財政再建に失敗した。

多くの政治家が政治的失敗の逃避として隠居した。隠居道楽として博物好き、本草好きの大名家や旗本の趣味人が集まって作ったのがこの会である。表向き殿様や旗本の道楽とは言い難かったので、国家万民のためと言う大儀名分で博物学・本草学の分野から有用な物を合議判定し、まとめようとしたが、身分の上下を問わず議論したという、平等で近代的な会であった。緒言とは医薬の祖とされる神農氏が薬草を定めるのに、赤い鞭を振るって草木をなぎ倒し、薬であるか否か百草を嘗めてみたいという故事に由来する。



3. 馬場大助の業績

彼は木曾義仲を先祖にもち番方(軍事関係)二千石の旗本として西の丸留守居役という破格の出世をし、78歳まで現役であった。仕事の傍ら緒言会に頻繁に出席して活躍するが、あくまでこの会は彼にとっては道楽であり成果を公表して世に問うものではなかった。好奇心の赴くままに自然や物を写生し物産研究・博物研究に努めた。しかし、自分の知らないことを知ろうとする好奇心と知識欲こそが学問の基本である以上、知ろうとして追求するその単純な行為の積み重ねこそが真の学問なのである。その行為を世間では「道楽」と称するが、日本の学問の伝統はこの道楽の系譜と言ってもよい。馬場大助を通して現代の細分化・専門化した学問を再考してほしい。

(公開講座委員・船坂正夫)

平成9年度 東海地区博物館連絡協議会 日本博物館協会東海支部総会に出席して

日時 平成9年6月19日(木)～20日(金)

会場 静岡県浜松市厚生年金健康福祉センター サンプア浜松

今年度は静岡県が当番・開催県ということで、「会員相互の連絡と博物館事業の振興をはかる」ことを目的に、神奈川県、静岡県、山梨県、愛知県、岐阜県の5県の博物館・園・個人会員等95名が参加して総会が開催されました。



以下、総会の概要を紹介します。

(協議会長挨拶)

東海地区博物館連絡協議会長、松浦國男氏より浜松市の史跡・美術館・記念館の紹介とこの総会が有意義な会になることを祈念なされた。

(来賓祝辞)

日本博物館協会専務理事、五十嵐耕一氏より配布資料の説明を交えて現在の博物館の置かれている状況と諸問題について次の話があった。

- ・海外観光の増加やテーマパークなど娯楽施設へ人が移り、博物館入館者の減少傾向。
- ・館園はリニューアルの時期を迎えている。
- ・人的、物的資源の有効活用には、館相互の連携と信頼関係の醸成が必要。
- ・学芸員の資質の向上や研修の体系が必要。
- ・農林水産省が農山村へ博物館情報を伝える事業を6ヶ年計画で実施する。

静岡県教育委員会事務局参事兼文化課長、飯田英夫氏より博物館の「本物が持っている力」のすばらしさに感動したという話をされた。

浜松市教育長、河合九平氏より浜松市が57万人が住む産業・工業の町であることや市勢の発展状況の説明と浜松市が今後、文化の町を目指していることを話された。

(表彰式)

井出コレクション代表、井出孝氏が表彰された。

(議事)

1. 平成8年度事業報告及び決算報告について
2. 平成9年度事業計画及び予算(案)について
3. 平成10年度開催県について

上記の議題1～3まで事務局から報告・提案通り、承認・決定された。なお、平成10年度の当番・開催県は愛知県に決定された。

(講演)

「寿命と芸術－博物館の果たす役割－」という演題で医学博士、平井光氏の講演がありました。



日本に於ける高齢化の状況や実態、それに向けての対応や心構えについて、詳細なデータと深い知識と経験を基にユウモアを交えながら楽しく話された。ユニークで大変勉強になった。

(施設見学)

予定では浜松市フルーツパーク・浜松市楽器博物館を見学するはずであったが、台風接近のため、残念ながら浜松市楽器博物館のみとなった。

(県博物館協会事務局・船坂正夫)

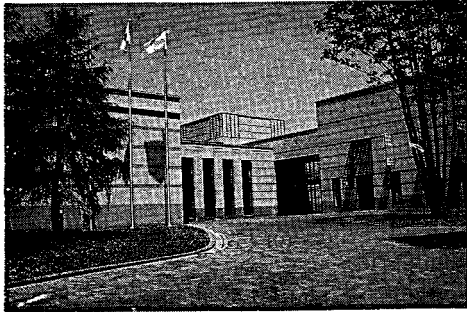
飛驒高山美術館

〒506 高山市上岡本町1-124-1

TEL 0577-35-3535

FAX 0577-35-3536

飛驒高山美術館は1997年4月に開館したガラス工芸と世紀末芸術を中心とした私立美術館です。

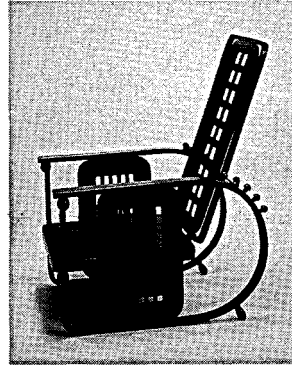
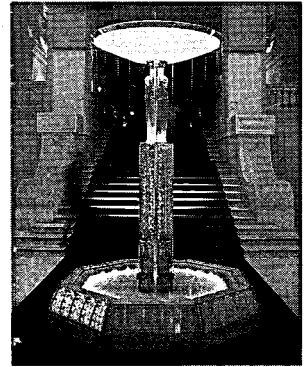


私共は今まで重要とされながら、国内で体系的に収集されてこなかったジャンルにスポットをあて、斬新且つ本格的な美術館を創ることを基本理念に考えました。国内にも数多くの独自性ある美術館がありますが、その多くが古美術だったり近現代でも絵画中心であり、世界的な視野に立って近代以降の工芸、デザインを積極的に取り上げているところはそれほど多くありません。

その点、飛驒高山美術館はガラスと世紀末芸術を活動の中心とする、明確なコンセプトを持った特色ある美術館といえます。16世紀のヴェネチアン・ガラスから、現代のヨーロッパ、アメリカ、日本の作品に至るまでの、世界のガラスが歴史的、系統的に収集されており、また、マッキントッシュやウィーン工房などヨーロッパの世紀末の装飾美術も特色となっています。

収蔵作品にはルネ・ラリックがパリのシャンゼリゼに作った高さ3m余のガラスの噴水、エミール・ガレがパリ万国博覧会に出品したガラス工芸作品を始め、ガレ、ルイ・マジョレルらの「ナンシー派」、英国のC. R. マッキントッシュを中心とする「グラスゴー派」、O. ワグ

ナーやクリムト、J. ホフマンを中心としてオーストリアで開花した「分離派」、ウィーン工房の家具、デザイン画、照明器具など優れた作品が数多く含まれております。



また当館は庭園にも生きた美術品ともいべき名樹を集め、展示空間デザインにも細心の注意を払いました。常設展示室のほかに企画展示室を設け、ライブラリーには多くのガラス、

デザイン・装飾関連の図書を収蔵しています。また、私設美術館初のハイビジョン・シアターではNHK中部ブレイズと共同制作したハイビジョン番組を上映しガラス美術への理解を一層深めて頂けます。加えて文化を大切にし、人を大切にする思いから岐阜県初のハートビル法にのっとった美術館としました。(ハートビル法……段差をなくし、高齢者・身体障害者の方に、利用しやすい建築を促進するための法律)

館内ではマッキントッシュのデザインしたテイルームもございます。夏にはオディロン・ルドン展(7.12~8.20)も開催中でもありますし、ぜひ一度、アールヌーヴォーと出会う旅をお楽しみください。

【交通】JR高山駅→バス10分/国道41号
→国道158号(荘川方面)200m
先左折

【開館時間】9:00~17:00

【休館日】12月31日のみ(団体割引あり)

【入館料】大人1300円 高大1000円 小中800円

(飛驒高山美術館 岩堤明子)

